

[「さくら」で見つけよう！ニッポン](#)[大学は進化する](#)[世界で活躍する日本人](#)[TOEFL受験者インタビュー](#)[テストセンターツアー](#)[地方セミナーのご報告](#)[HOME](#)[メールマガジンに登録する](#)

## 「さくら」で見つけよう！ニッポン

NHKの朝の連続テレビ小説「さくら」をご覧になっていませんか。主人公の「松下さくら」はハワイ生まれの日系4世。祖国日本に憧れて、1年間を中学校のALT（英語指導助手）として過ごすために来日しました。



この「さくら」が巷でも大人気です。ストーリーもいよいよ大詰めで、視聴率もドラマ部門の堂々トップに。きっと、英語に関心のあるTOEFLメールマガジン読者にも「さくら」のファンが多いのでは・・・というわけで、CIEE TOEFL事業部では、NHKの「さくら」担当プロデューサー：吉川 幸司氏にインタビューを敢行しました。TOEFLメールマガジンならではの切り口で、一般のテレビ雑誌には載らない制作秘話も語っていただきました。

## 大学は進化する

少子化が進み学生数が減少しています。また、ネットワーク化が進み大学を取り巻く環境が変化しています。このことを考慮すると、今大学に今求められていることは何か必然的に浮かび上がってきます。多くの大学で試みがなされている中、今回は関西外国語大学の取り組みをご紹介します。国際交流部長の山本氏は国際交流部門で長年貢献されており、斬新なアイデアと実行力で関西外国語大学を牽引して来られました。今回は、鋭い切り口で大学教育について、特に外国語教育の観点から語っていただきました。

## 世界で活躍する日本人

国際化が叫ばれて久しいなか、語学の上達はもちろんですが、それをを用いて何をすることが重要になってくるのではないのでしょうか。世界がこれだけ多様化するなかでの日本の役割のひとつに、途上国支援があります。情報技術という新しい形で途上国支援にかかわっている、国連開発計画（UNDP）キルギスタン事務所プログラムオフィサー・河辺 耕二さんに、外国語修得の道のりや自らの異文化体験談も交え、3回にわたって寄稿いただきます。

今回は連載の第2回目で「異文化交流」をテーマにお届けいたします。

## TOEFL受験者インタビュー

8月15日、この日は我々日本人にとってどのような日であるのか、改めて自分の胸に問うことになりました。毎年、戦後何年といわれ、心のどこかで意識しながらも、事実が史実に変わりつつある現代に生きる我々にとって、今回の受験生の言葉には『重み』があり、真実を伝えることの大事さを痛感いたしました。また『英語は、あくまで人間同士のコミュニケーションのための道具である』、この使い古された文章があまりに新鮮に感じられたインタビューとなりました。

## テストセンターツアー

---

約1年に渡って全国のCBTテストセンターを紹介してまいりましたが、今回の新横浜会場をもちまして最終回を迎えます。JR新横浜駅徒歩5分と交通の便も非常によく、落ち着いた雰囲気のあるテストセンター。またワールドカップ決勝戦が行われるなど国際都市としての躍進も著しい新横浜。世界へ羽ばたく第1歩は新横浜テストセンターから！

## 地方セミナーのご報告

---

国際教育交換協議会(CIEE) TOEFL事業部では毎月2回無料のTOEFL説明会を東京で行っておりますが、地方からの熱いご要望にお応えし、4月と6月には広島・福岡・京都でも開催いたしました。今回は各セミナーのご報告をお届けいたします。

## ■ 特集： 「さくら」で見つけよう！ニッポン

～NHK番組制作局ドラマ番組部 チーフ・プロデューサー 吉川 幸司 氏～

NHKの朝の連続テレビ小説「さくら」をご覧になって  
いますか。主人公の「松下さくら」はハワイ生まれの  
日系4世。祖国日本に憧れて、1年間を中学校のALT  
(英語指導助手)として過ごすために来日しました。  
日系人といっても生粋のアメリカ人であるさくらにし  
てみれば、現実の日本はハワイで心に思い描いていた  
よりもずっと「不思議の国」だったはず。それでも異  
文化に揉まれながらも、前向きに一步一步相手の文化  
を理解して成長していく彼女の姿に共感を覚える方も  
多いのではないのでしょうか。



この「さくら」が巷でも大人気です。ストーリーもい  
よいよ大詰めで、視聴率もドラマ部門の堂々トップに。  
きっと、英語に関心のあるTOEFLメールマガジン読者にも「さくら」のファンが多いの  
では・・・というわけで、CIEE TOEFL事業部では、NHKの「さくら」担当プロデュー  
サー：吉川 幸司氏にインタビューを敢行しました。TOEFLメールマガジンならではの  
切り口で、一般のテレビ雑誌には載らない制作秘話も語っていただきました。

(この記事は、2002年8月23日に配信されました。)

--- 毎朝、一視聴者として楽しく拝見させて頂いております。今回NHKの朝の連続テレビ小説に、日系4世のアメリカ人である主人公さくらが日本で自分探しをするという題材を選ばれた理由は何でしょう。

NHKの朝の連続テレビ小説は今回で66作目になります。既に三十余年続けておりますが、女性の主人公を描くことがとても多いのです。初期の頃でいうと、初めて新聞記者になった女性や、初めてパイロットになった女性、男女共学になって男子校に乗り込んだ先生の話という風に、いわゆる「女性初めて物語」という意味合いが強かった。このシリーズは、朝放送し、朝見て頂き、一日の始まりとして元気になって頂くという大きな使命があります。そのため、がんばり屋の女性がいろんな壁にぶつかってハードルを乗り越えて進んでいく姿を描くことが多かったわけです。



今回、私が朝のテレビ小説担当になったときに考えたのが、現代の女性を主人公とした場合に、乗り越えるべきハードルとは何かということでした。昔に較べると、女性の社会進出も進み、社会も女性が能力を発揮できる制度や法律を整えてきました。NHKにも子育てしながら責任ある仕事を果たしている女性がたくさんいます。その中で日本人という限定でなければ、「文化の違い」が一番大きなハードルではないかと思いついたわけです。21世紀はグローバルな時代。文化、価値観、習慣の違いがクローズアップされてきます。

そんな中で、文化の違いを乗り越えながら一つのものを手に入れていく一人の女性の姿を描



きたいと思い、ハワイ生まれの日系4世を主人公にしました。ハワイの中の日本文化に純粹培養された女性が、理想像の日本を心に描きながら今の日本へやってきた時、当然現実とのギャップに戸惑うだろうし、アメリカ人として育ってきた訳ですから、日米の文化ギャップにも立ち向かっていかなければならない。一人の主人公の中に文化ギャップを設定して、それにぶつかって乗り越えていくことで何かを勝ち得ていくというドラマを作りたいと思いました。

もう一つ動機があります。NHKが制作した「のど自慢 in ハワイ」という番組では、日系1世、2世、3世の方はもちろん、あまり日本語を話せない4世の方も日本の歌を一生懸命歌ってくださいました。そこに非常に色濃く出ていて私たちが感銘を受けたのが、ハワイの日系人たちの故国日本に対する強烈な郷愁です。これだけ日本全国、飛行機や新幹線ですぐ行ける時代になると、故郷や故国に対する郷愁は日常生活でなかなか強く感じることはありませんが、ハワイ生まれの日本大好きという女性を通じて、自分達が失いつつある想いを描いてみたいと思ったのです。日系移民は1868年に始まり今年で134年になりますが、その長い歴史に息づいた日系人たちの郷愁の象徴的存在が「松下さくら」なのです。朝のテレビ小説ですから、明るく、楽しく、笑いを交えて描いていますが、134年分の日系人たちの辛い思いや日本への絶ちがたい郷愁を背負ってやって来た存在です。このように非常に大きなフレームを設定して、その中で文化的なギャップや考え方の違いなどを描いていきたいと思いました。

ただ、これはギャップを描くドラマでも、ギャップにぶつかって日本人をおかしいと思うドラマでもありません。さくらという特殊な人物を設定することによって、国籍や人種に関係のない、21世紀の人と人との関わり方、和のあり方を何か提示できればというのがこのドラマの制作意図です。

--- 現代の一番大きなハードルは「文化の違い」だというのは頷けますね。80年代頃から国際化と叫ばれて久しいですが、何故かいつまでも新しいもののように扱われます。野口五郎さん扮する英語の沢田先生が「そんなくだらない会話なんかする暇があったら、単語のひとつでも覚えて。うちは進学校なんだから」と言ったりすると、「ああ、きっと今でもあるんだろうな」と思わせます。

私たちの学生時代にいたタイプの先生とも言えますよね。特に初めの頃は、さくらというアメリカ人の見た目でも典型的に描いています。英語教育については、監修の吉田研作先生に「日本には日本の英語教育のやり方がちゃんと考えられている。ただしゃべれるだけが英語教育じゃない。一つのコミュニケーションの手段なのだから筆談でもいいわけだし、学んでいる人たちがいる時は論文を書いたり読んだりしなければならないかもしれない。そういうことも含めた『道具としての英語』を教育する手段として、日本の英語教育は会話だけではなく、時には古めかしい文語表現も教えるんですよ」と伺って、「これは日本的だな」と思ったのです。そこで6週目でさくらと他の先生が英語の授業方針についてもめるエピソードで校長先生の台詞に採り入れました。「これは是非はあるけれども、日本人のとても素敵どころだ」とね。日本人は、漢字からカナを産み出し、大陸伝来の仏教から日本的な仏教文化を開花させた。外国から伝わったままではなく、自分達に合うようにアレンジし日本化するのは。そういう日本的な文化の受け入れ方をちゃんと認めることも必要じゃないかと思えます。あのエピソードは、日本の英語教育批判のようにみえて、日本の英語教育をもう一度見直してみようよというメッセージが込められているのです。



とにかく国際化というと、外国の方々とコミュニケーションをしたり、相手の言葉や習慣を理解したりすることだと思われがちですが、逆に外国の方と向き合った時に、日本文化の素晴らしさや日本のやり方を歴史的観点から説明できることも重要です。つまり国際化はお互いの文化を尊重することだとすれば、自分たちの文化の成り立ちや日本人のメンタリティーを説明できなければならない。それを静かにメッセージしたいと思っています。日本の人間関係、夫婦・家族のあり方、教育のあり方を否定するのではなく、何故日本人はそうしてきたかをちゃんと理解しましょうよ、という日本再発見のドラマであり、それはやはり「さくら」という異分子が入ってきて初めて自覚することなのです。日本人だけの均一社会ではあえて

えて物事の根源を問うことはなかなかありませんが、さくらのような異分子が入ってくることによって、もう一度我々自身が日本や日本人を捉えなおす。その取組みが国際化への第一歩になるのではないかと思います。

--- 今回の制作にあたって、これまでのシリーズと違う点は何でしょうか？



これまでのドラマは大体短くても10~15年のスパンで描いていたのが、今回のヒロインにはたった1年という限られた時間しかありません。これまでの朝のテレビ小説では、恋愛、結婚、出産、育児といった女性にとっての節目節目にメモリアルな出来事があり、それを乗り越えて行くことでドラマが進むことが多かった。前作の「ほんまもん」然り、「ちゅらさん」もそうです。ただ今回はたった1年で結婚・出産・育児は無理ですから、彼女の周りに何かが起こり、それに関わっていくことで彼女の人生に反映して行くという今までに無い新しい朝のドラマの形をとっています。いわば、「さくらの日本日記」というような意味合いが強いのです。そういった形で、26週間、156本のドラマを作りあげていくのは初めてですし、大変苦労するところですね。

--- 今回主人公がアメリカ人であることから英語の台詞が多いのも特徴ですが、言葉の点で苦心されていることはありますか。

朝のドラマは50代以上の方にも非常に楽しみにして頂いていますが、中には英語に拒否反応を示される方もいらっしゃると思いますので、字幕の分量には気を配っています。ですから、ハワイの家庭ではおじいちゃんの遺言で全て日本語で話すことにしているという特殊な設定にしました。これまで朝のテレビ小説をあまりご覧にならなかった新しい方にも、これまでずっと楽しみにしてきた方にもそれほど違和感なく見て頂きたい。ドラマとしては、彼女がハワイ生まれの日系アメリカ人であることを取っ払って、ただの普通の日本の女の子として見ても面白いと思っていただけるように作っています。

また、番組の終わりにAppleから始まって英語を一言入っていますが、あれも番組を通じて多少でも英語を身近に感じていただければという思いで始めたことです。ちょうど26週間の放送ですからアルファベットの26文字と一緒に発見したスタッフがおりまして、AからZまでやろうということになりました。来週は何だろうと皆で単語を予測して楽しむ方もいらっしゃるそうです。

--- さくらがALT（英語指導助手）であることから、現場の先生方からの反応はいかがでしたか。

私たちはドラマ制作にあたって、さくらと同じような日系3世や4世でALTとして来日した方々に会ってお話を伺い、エピソードを作りました。やはり最初はびっくりされたことが色々あるようです。例えば、女性の先生がお茶汲みをするべきだと決められているわけでもないのに、何となく女性がやっている。誰も強制しないのに何でだろうと思ったとか。宴会になると非常に先生たちが盛り上がるとか。そういうエッセンスを割と盛り込んだつもりです。先生たちはいつも教室では先生の顔をしているけれども、職員室で生徒がいなくなると人間的な顔になる。そこがまた素敵な部分でもある。

初期の頃は、アメリカ人のさくらの目から見た姿ということで少し強調して描きましたので、「そんなことは今はやっていない」「日本の教師をばかにするな」というお叱りも受けました。ただ、それで日本の学校現場を否定しようと思っているわけではなく、一種人間的な先生たちとのふれあいの中から、さくらは「教育って素晴らしい」と思いますし、「先生になろうかな」なんてことを言い出すのです。

さくらも最初は反発しますが、日本人のメンタリティーの問題に触れていく中で、「なるほど、そういうことってあるよね」と感じていきます。アメリカ人同士であれば全て言葉で解決しよ

うとして駄目だったら別れるということになります。言わないで保っていくという日本のアプローチもある。そういう日本人的な集団力学も悪くないな、とさくらは思うのです。ただお互いにあまり溜めているのもためだから、一度おばあちゃんとお母さん、言いたいことをいって下さい、という回もありました。日本人の家族たちも思ったことを言い合ってお互いにすっきりして、それでまた同じように家族の形態を続けていく。日本がいい、アメリカがいいというのではなく、ぶつけ合うことでもう一つ違うステージに行ければいいと思わせるようにしたい。そういう意味ではドラマとしては試行錯誤ですね。

--- ヒロインの選考にはやはり英語力もポイントになりましたか。

オーディションには、総勢2,512人のプロ、あるいはプロを目指している女優さんが集まったのですが、英検やTOEFLの高い資格を持った方も多かったです。それから、帰国子女で母国語同様に話せる方も相当いらっしゃいました。もちろん英語が話せるということは一つの条件でしたが、最大のポイントはやはり人物です。書類審査、3回の面接、カメラテストと5回ほどテストを行うのですが、さくら役を射止めた高野志穂さんは回を重ねる毎に光輝いていきました。最初から同じ印象の人もいれば、悪くなる人もいるし、どんどん良くなる人もいます。どんどん良くなるということは、色々な場を与えられることに順応して伸びていくタイプの人です。私は記者会見での質問に答えて、高校野球で初出場だけれど戦う毎に実力をつけて優勝しちゃった池田高校みたいなものですと喩えたのですが、どんどん光輝いていくその伸び方に私たちは惹かれ、これで1年やったらもっと光ると思って選びました。結果、思いどおりでした。



--- やはり、このシリーズのファンである一視聴者としても、ヒロインの笑顔がいいと一日気分がいいなと感じますね。時にはめげるけれどもすぐに立ち直るヒロインの姿に結構元気を貰っています。

これからさくらにも人生最大の危機が起きたりするのですが、それを乗り越えていくのに自分なりに闘っていくことになります。いい戦い方をしてもらわないと、見ているお客さんも嫌になってしまいますから、それはさくららしい解決の仕方です。立ち直っていくという風に描かなければなりませんね。

--- 最後になりますが、視聴者の方に、今後はこういう風な考え方をされたらどうでしょうというご意見があれば是非お話しください。

私も脚本家の田淵久美子さんもそこは非常に似ているのですが、あまり結論というものをを出していません。少し生意気なことを言うようですが、皆さまに考えて頂くための素材を提供していると考えています。「こう考えたらどうですか」ということはあまり言いたくないし、そういうドラマでもない。ただ、これまでにない21世紀型の朝のテレビ小説だという自負はございますので、一つでも二つでも、何かを考えるヒントになればという思いで作っております。ヒントにならなければ笑い飛ばして楽しんでいただければ結構なんですよ。

--- TOEFLメールマガジン読者は、英語教育や国際交流に携わる方、興味を持っておられる方が多いので、本日のお話は、読者の皆様にも何かのヒントを与えていただけたかもしれません。これからの「さくら」の展開を楽しみにしています。今日はお忙しいところ、本当にありがとうございました。

(インタビュー：TOEFL事業部 峯 純子/6月10日)

[Back to top](#)



## ■ 特集：大学は進化する

～ 関西外国語大学 国際交流部長 山本 甫 氏～

少子化が進み学生数が減少しています。また、ネットワーク化が進み大学を取り巻く環境が変化しています。このことを考慮すると、今大学に今求められていることは何か必然的に浮かび上がってきます。多くの大学で試みがなされている中、今回は関西外国語大学の取り組みをご紹介します。

国際交流部長の山本氏は国際交流部門で長年貢献されており、斬新なアイデアと実行力で関西外国語大学を牽引して来られました。今回は、鋭い切り口で大学教育について、特に外国語教育の観点から語っていただきました。



(この記事は、2002年8月23日に配信されました。)

### 山本 甫 (やまもと・はじめ) 氏 プロフィール



関西外国語大学外国語学部卒業。  
ウィスコンシン大学大学院修士課程修了。  
関西外国語大学外国語学部英米語学科専任講師、助教授、教授に就任する一方で、特命を受け、1971年より国際交流の企画・推進に努め、以来一貫して同大の国際交流プログラムの拡充にあたる。  
現在、同大教務部長兼国際交流部長。

--- 本日は貴大学の外国語教育についてお話し頂ければと思います。改革と言いつつ、実際は何も動いてない、あるいは外国語教育を変えようと言っているところもあります。本質的なご意見をお願いいたします。特に、貴学は国際理解や国際分野に重点を置かれていると認識しておりますので、それについて特記することをお話してください。新キャンパスの紹介も頂ければありがたく存じます。

**山本：**国際化が叫ばれて久しいですが、現実的に言われているほど国際化していないと思います。しかし、ここ一年ぐらいから我々の足元が見事に崩れてきて、社会変革が急速なテンポで行われているという現状があります。単に日本国内だけでなく、グローバルな競争をしていかないと駄目な世の中になってきています。その中で大学が何を望まれているのか。今までの大学は店を開ければ学生というお客は寄って来た。必ずしも店の商品の質の高さを求めてくる訳でなく、ブランドだけで大学を選択する。ブランドの中身が問われていない時代でした。しかし今は大学がすさまじい競争社会になり、真の国際化が迫られています。この中で正に大学の中身が非常に厳しく問われる時代になってきているとの認識を持っています。

現在は非常に価値が多様化し、しかも社会が変革してきています。そうすると外国語の知識は一番求められる最低必須条件だと考えています。外国語がいわゆる習得で事足りた時代から、外国語が使えるということがミニマムの条件になっています。当大学はそこに焦点をあてながら、外国語の習得とその先をリンクして考えていく必要があると思います。外国語を使って自分の専門知識を持つという方向性をきちんと見据えていかなければならない。大学の中でしっかりと語学教育をすると同時に、大学の中で社会学、ビジネス、会計学を勉強したい、多種多様な人が出てくると思うのです。外国語大学は、外国語教育をするだけでは足りない時代に入っているわけですから、外国語習得を最低条件にしながら、それぞれの教育分野の専門知識の習得を目指す方向で行かなければなりません。そうすると一つの外国語大学の中に社会学、文化人類学、言語学、ビジネス、会計学というような無限のカリキュラムを持たなければなりません、個々の大学内だけで提供できるわけがありません。我々が今目指して着実に実行しているのは、43ヶ国、250の大学のネットワークを利用しさまざまな専門知識をつけさせようとしています。各大学で提供されるいろいろな専門分野の講座をとれば学べない分野はないはず。日本の外語大学の中で四年間の学習をしようとするのではなく、むしろ外国語を習得しながら、ひとつの専門分野の知識を外国の大学で身に付けていくスキームを作っていくことです。当大学はそれを目指しています。

外国語の習得に秘策も奇策もありません。着実に学んでいかなければならないのですが、実に時間のかかる作業であり、その割には成果がなかなか見えにくい。一ヶ月集中して勉強したら一ヶ月後に見違えるように語学の達人になったということは絶対あり得ない。結局、毎日勉強していく、しかしその努力は薄紙を剥いていくようなものだと思います。なかなかうまくならない、成果が目に見えない、そうすると人間は途中でギブアップしたくなる。外国語を主として教えるところは、いかにして最初のモチベーションを継続させる工夫をするかが非常に大きなポイントになります。

#### 動機付けとしての留学

うまく教えることも大事ですが、動機付けが大切です。そのためには語学学習の目標を絶えず設定することが大切です。当大学は年間1200～1300名を海外に送っており、その中の約400名が長期留学生（1年以上の留学）ですが、それだけ多数の留学生を派遣している大学はなかなかないと思います。少し努力すれば長期留学できる制度にしています。大学が留学先の授業料を負担したり、寮費・食費の部分もカバーするフルカバレッジの学生も数多くいます。それと一番大事だと思うのは、送る人数です。学内で10人や20人しか送らなければ、みんな自分は無理だと考えます。当留学制度のポイントはわざと大勢送ること。ちょっと頑張れば手の届くところに留学制度を置いていることが英語学習にも大きな動機付けになるわけです。留学を在学時代の努力目標にすることによって、語学学習の継続の源としていく。実際に留学をしたら、留学ネットワークで専門知識を得ていく。関西外大へ来て社会学を勉強すると聞くと不思議に思うでしょうが、留学ネットワークでそれは充分可能です。

#### 海外留学生との交流

留学制度と同時に、日本に興味を持っている留学生を多く関西外大に招聘することが大事です。色々な文化背景を持った留学生が学内にいれば、交流を通じて自然と異文化への興味、ひいてはその語学に対する興味を持つことにもなるでしょう。大学は自主的に勉強するところであり勉強しない学生は放っておけばよいという考えが主流ですが、当大学は学ぶ環境を絶えず作って行こうとしています。留学生を招いての自然な交流や留学生が学ぶ授業への参加、外国人と一緒にスピーキング・パートナーのような制度で交流する仕掛けや、ホームステイなどの制度を持つことで、絶えず刺激を与えようとしています。語学学習には、もちろん自分の普段の絶え間ない努力が非常に大事ですが、努力する環境を大学が作ることもある意味で大きなポイントになると思っています。語学を確実にマスターした上で専門知識をも修得させたいというのが、当大学の基本的な考え方です。



--- 学生の質の低下が全般的に指摘され、新入生の英語力が充分ではない現実があります。また例えば、物理学科にもかかわらず入試で数学も物理も受けずに入ってくるようなギャップがあり、実際にその環境を作ってもうまく回っていくのかという危惧があります。その点でどのような対策を考えておられるのでしょうか。

**山本**：確かに英語の時間数が中・高で減ってきているということは、ある意味で入学する学生の質の低下を招いています。しかしながら一番大事なことは、開いている店の商品（教育内容）と、どういう学生が欲しいかをできる限り明確化しておくこと。「関西外大に来ればこういうメニューがあって、こういうことを目指そうとしている大学ですよ。だから、これに合致する人は来てください」というメッセージを伝えることが大事だと思います。当大学は語学教育をしっかりとやる大学ですよ、そのためにこんなプログラムを用意していますというメッセージをきちんと持つことが、入ってくる学生の質を高め、モチベーションを持って入学してくる最大の理由だと思います。関西外大の学生はよく学ぶと言われています。事実結構まじめな学生が多いことを考えるとその辺りがうまくいっているのでしょうか。留学したいという目標を明確に持って入学してくる学生は非常に多いと思う。入ってくる時から学生の方にもその前提となる期待が明確になっているのです。

--- 400名ほどの長期留学生というのは全学の大体何パーセントくらいになるのでしょうか。

**山本**：長期留学生だけに限定にすると語弊がありますが、本学から海外に行く学生は大体毎年1200～1300人位いますので、全体からいうと、四年間のうちに学生の半数くらいが大学主催のプログラムに行っています。

--- 1年間の留学の前後を較べて、明らかに努力したなという点は見られますか。

**山本**：留学はかなり大きなインパクトを持っています。単に一年海外で生活しましたという程度を目標にしているのではなく、明確に何を学びたいのかという科目の指導がかなり行き届いています。学生も一年間はその方向に従って学習するので、我々の目からみても顔つき・目つきが変わってくるということははっきりと言えるでしょう。行く前と、一年経って帰って来たときでは全く違う、精神的に強くなり自信を付けたという学生が非常に多い。

--- おもしろい試みで、今後増加するでしょうね。経済的な問題も考えられますが、人数が多くなれば違いがでできますね。

**山本**：1年の長期留学を現在さらに拡大していますから、今後も派遣する数はかなり大きなものになっていくでしょう。学部でいうと3回生の時に留学するのが、一応の目標であり主流です。1～2年間、大学でしっかり勉強して3年生になったときに留学するというパターンが非常に多いと思います。

--- 大学の淘汰について：学生の学力低下がメディアから伝えられることが多いですね。大学も今後潰れるところもあれば、伸びるところもあることを考えると、やはり差別化が進んで当然という気がします。

**山本**：少子化で大学が潰れる、つまり大学冬の時代に入っていますが、この少子化ほど大学業界にとって幸せな時代はないと思っています。日本史をずっと見ると日本が内から変わったことは一度もない。黒船が来て、慌てて明治維新になる。だから絶えず外圧という言葉が日本語の中にもあるように、内から変わるのではなく外圧でしか日本は変わらない文化ではないでしょうか。もし少子化にならず18歳人口がピーク時の230万のような時代がずっと続けば、大学業界のバブル期です。店を開けばお客が来る、どんな商品を置いても店に入ってくるのであれば、大学は絶対良くなりません。これが少子化のせいで潰れる大学が出るのではないかと危惧があるから、生き残るためには変革しなければならないと思うのです。

日本の大学のレベルアップに、少子化はおそらく大きな貢献をすることでしょ。生き残れない大学は、当然潰れて然るべきで、存在価値はありません。結局今の時代は、学生という消費者から製造者である大学が商品の吟味をされることだと思います。少子化という今の現象は、大学を良くしようという上では無上の追風だと考えます。

--- 競争が無いところに、発展も淘汰もないということですね。例えば、今まででも私立大学は経営が悪いから潰れるかもしれない危惧はありましたが、国立もこれからは他人事ではないということでしょう。

**山本**：日本の大学を一番悪くしたのは、国の規制だと思います。アメリカのように自由に大学を創らせない。大学を創るには審査が厳しくて二年もかかる。この事が競争相手を産まず、大学関係者は努力せずに生き残ってきたのだと思います。できる限り競争して発展するという原理を阻害するシステムを作っては駄目です。なかなか創らせないということは、逆に創ったらこっちのものだと。結局、競争相手が産まれぬ。今の日本の教育の諸悪の根源はそういうシステムです。アメリカなどは自由に創らせる。そしていくらかでも転校できる。そうすると関係者は教育内容を良くしないと学生に逃げられるから、必死で努力します。結局少子化によって競争せざるをえない状況に追い込まれていることが、大学全体のレベルが上がっていく一番大事なことだと思います。

--- 大学に入学したら、学生も後は勉強をしなくても自動的に進級でき、追い出されることは無いのが昔からの定説です。大学自身とともに大学生も多分変わらなくては行けない。

**山本**：社会が変革し激しい競争社会に入りつつありますから、大学出というブランドだけでは通用しない時代になってきました。「どこの大学」で「知識はこれ」「技術はこれ」と言わないと駄目な時代です。だから学生も好むと好まざるとに関わらず、店（大学）を選ぶのに、自分が果たしてそこで何を身に付けられるのかということを考えていかなければなりません。大学もそれに対応せざるをえない状況に追い込まれている。学生も大学も変わらなげやならない時代です。

--- 新キャンパスについて：キャンパスを新しくされたのも、店構えつまり外観も変えようと思われたからですか。

**山本**：別に20年も前から新キャンパスを探していたというわけではありません。たまたま駅に近いところに大きな土地を買えるという申し出がありました。ソフトの充実とともに、ハードもきちっとしなくてはならない。前のキャンパスも悪くはないのですが、駅により近くなると学生の通学の利便性もよくなり、しかも同時に設備も充実させることができるわけです。その意味で絶えず進化させる努力が必要だと思います。

--- TOEFLに関連して：TOEFLが難しいという声も一部にあり、ITP（TOEFLの団体向けプログラム）にももっと易しいものを作って欲しいというニーズがあります。大学生が英語をやるのに易しいレベルにあわせる必要があるのでしょうか。2004年の7月にはETSがSpeakingを含めた新世代TOEFLをリリースする予定です。聞いた内容を要約して書く・話すといった統合的問題が出てきます。今の普通の外国語教育をされている大学では、とてもついていけないんじゃないかと危惧しています。

山本：結局我々の英語教育を取り上げていくと、まさしく英語ができることが最低限の条件になってくるわけですから、そこをしっかり押さえていかなければなりません。程度を落とすこと自体、今の社会から求められる水準を思うと全く考えられないことです。国際社会の中で運用能力のある人間の育成ということが、当大学の骨格で目標ですから外すわけにはいきません。むしろレベルや目標数値は高ければ高いほどいい。人間というのはおかしなもので、目標数値が低ければ低いほど実力がだんだん下がって行くのです。下方に平準化するという傾向があるので、やはり昔から「目標は高く、志は高く」というのはあながちでたらめではなく、人間の心理を突いているんじゃないかと思います。

(聞き手：TOEFL事業部長 高田 幸詩朗)

[Back to top](#)



## 世界で活躍する日本人

～ 国連開発計画（UNDP）キルギスタン事務所 プログラムオフィサー 河辺耕二 氏（第2回）～

国際化が叫ばれて久しいなか、語学の上達ももちろんですが、それを用いて何をすることが重要になってくるのではないのでしょうか。世界がこれだけ多様化するなかでの日本の役割のひとつに、途上国支援があります。情報技術という新しい形で途上国支援にかかわっている、国連開発計画（UNDP）キルギスタン事務所プログラムオフィサー・河辺 耕二さんに、外国語修得の道のりや自らの異文化体験談も交え、3回にわたって寄稿いただきます。今回は連載の第2回目で「異文化交流」をテーマにお届けいたします。



（この記事は、2002年8月23日に配信されました。）

### 河辺耕二（かわべ・こうじ） 氏 プロフィール



- 1996年9月～1998年12月 青年海外協力隊システムエンジニア  
3年間の生命保険会社勤務を経たのち  
青年海外協力隊に参加、ブルガリア・  
ヤンボル市の歴史博物館にて遺跡デー  
タベース、システム構築に従事
- 1999年7月～2000年10月 London School of Economics and  
Political Science (LSE) 留学  
(MSc in Development Studies)  
開発学、とくに情報社会と途上国支援  
というテーマを主に学ぶ
- 2000年12月～2001年10月 国連開発計画（UNDP）ウズベキスタ  
ン事務所 国連ボランティア  
UNDP情報技術関連プロジェクトの政  
策アドバイスに携わる
- 2001年12月～現在 UNDPキルギスタン事務所 プログラ  
ムオフィサー  
情報技術関連プロジェクトのマネジメ  
ントに従事

今回は連載の第2回目として「異文化交流」というテーマに焦点をあてて書いていきたいと思  
います。「異文化交流」などと言われると非常に難しいもののように聞こえるかもしれませ  
んが、私は異文化交流の専門家でもありませんからそれを社会的に分析できるわけがなく、  
自分の体験から感じたり考えたりしたことを書かせて頂きますので、読者の皆様には気軽に  
読んで頂ければと思っています。

### ブルガリアでの体験



私自身、異文化交流などという言葉は初めて聞いたのは、協力隊に参加する前の研修(語学訓練と呼ばれています)の中で行われた異文化理解のための講座だったと思います。残念ながら、その講座でどのようなレクチャーがなされたのかは記憶にないのですが、その当時は自分の中であまり興味あるテーマでなかったことだけは覚えています。文化が違うといっても同じ人間なんだし、柔道や日本語を教えに行く人たちとは違って、自分はシステムエンジニア

としてのスキルだけ身に付けていけばなんとかなるだろう、とたかをくくっていたところもありました。ところが赴任地のブルガリアに到着して2ヶ月ほどたつと、それまですべてが新鮮であった現地の人々の態度、立ち居振舞い、礼儀作法、食べ物、仕事などなど、全ての面でフラストレーションを感じるようになってきました。例えばブルガリアは旧共産圏の国ですから、私がいた96年頃の段階ではまだまだ商業活動に「サービス」という概念が大変希薄であるわけです。コーヒーでも飲もうと思ってカフェに入って座って待っているとなかなかウェイトレスが来ない。(私に気付いているくせに友達とのおしゃべりに忙しかったりする・・・) 日本人的に下手に出て「すみませんがオーダーを宜しくお願いします」と頼むと、ぎろりと睨まれ、一見して「面倒くさい」と分かる態度でこちらにオーダーを取りにやってくる。コーヒーを頼むと無言のままそそくさと戻り、また無言でコーヒーをこちらに運んでくる。日本で育った私は、ついついこちらから彼女に「ありがとう」と言ってしまう。そのくせカフェを出た後で「なんでこっちがありがたがらないといけないんだ?」というような感じで、つまらないことなのに腹が立ってくる。日々の仕事にしても、自分がこんなに一生懸命になって夜まで働いているにもかかわらず、彼ら自身は業務時間中に平気で市場に買い物に行ったり、化粧や友達同士のおしゃべりに余念がなかったりする。挙句の果てにそんな彼らから「仕事は誰か他の人にやらせれば世の中回っていくんだから、お前も定時に帰ってもっと人生を楽しまなければ駄目だ」などと説教される始末。同僚の家に招待され、自分も漸く現地の人と理解し合えるようになった(!)と気が緩んだそのすきに、後から後から出てくるすさまじい量のご馳走とお酒のふるまいを断ってしまったが為に同僚一家の機嫌を損ねてしまい、「全部食べることができなかった自分が悪いのか、相手が外国人を理解しようとしていないのか、それともブルガリアの文化に断るときの一定の型があるのか?」と一人思い悩んでしまったりということもありました。「食」も文化ですからこのことも触れます。日本料理は味も栄養も形も非常に洗練されているために、また現代の日本人は幼少の頃から様々な国の料理に囲まれて育ってきているため、我々の好む好まざるにかかわらず「日本人の舌は世界で一番肥えている」というのが私の持論なのですが、その日本人が海外に長期滞在してもっとも苦しむのが現地の食事だと思います。ブルガリアにしても味付けがシンプルだし、肉や野菜など新鮮な素材が多いのでとてもおいしい料理が多いのですが、料理のバリエーションが少ないので一ヶ月も二ヶ月も同じ味付けのものを食べていると飽きが来てしまい、それがまた大変なストレスになってしまう。そんなことを繰り返しているうちに、ひょっとしたら今自分が感じているストレス、まさにこれこそが異文化交流というものなのかもしれない、と感じ始めました。つまり自分の日常生活や精神衛生状態を防衛するために、異文化理解の必要性に初めて目覚めたのがこの頃だったのかもしれない。

## 日本人と異文化との接触

異文化からやってきた人をなぜ理解しなければいけないのか、それは人それぞれによってモチベーションが異なると思います。ある人は外国の人たちと商売や仕事をしていく上で「仕方なく」彼らを理解する必要があるために、またある人はクラスメートに留学生がいて彼らと一緒に勉強生活をしていくために、また別の人には自分の世界観を広げるという目的を持って異文化理解の必要性を感じているのかもしれない。私の場合は、そこに滞在して仕事をし生活をするために異文化を理解しなければならない状況になっているのですが、国際化がいろいろな分野で身近な現実になってきている日本社会においては、異文化理解の必要性が年々高まってきているのではないかと思います。私が小学生だった1970年代の日本で、友達が海外旅行に行く、ということはある意味で仲間内での大ニュースであったと記憶しています。しかしながら1980年代になると、世界第二位の経済力からくる豊かさが一般市民まで浸透し、大学生や高校生が海外旅行をすることが普通になり、さらに1990年代からのインター



ネットの爆発的普及、世界貿易・金融システムの自由化進展などの流れの中で、今までどちらかといえば閉鎖系の中で生きてさえすれば万事がうまくいった日本人の間にもグローバル化の波が急速に押し寄せるようになった。それも、海外旅行をして外国の文化や人々と接触するという、いわば「ソフトな」異文化接触の機会が増えたというだけでなく、少数の大企業の、そのまた少数の国際関係部署に配属されたサラリーマンだけが海外出張や海外駐在などのために「ハードな」異文化接触を迫られた時代から、どちらかといえば今まで外国とは無縁であった中小企業、非政府組織(NGO)や市民社会活動に携わる学者や主婦・学生など、幅広い層の日本人にとってかなり密度の高い異文化接触の機会が身近なものになった時代になってきた、ということがこの本質ではないかと思います。ただ異文化理解ということで私がいつも気になるのは、どうしても「異文化理解=日本人が異文化を理解する」という図式で捉えられがちなこと。異文化を理解することとは、お互いがお互いの文化を理解しようとする努力をもとにした、双方向の精神的営みだと思えますし、そうでないと非常にゆがんだ形の国際交流、外交手法になってしまうのではないのでしょうか。ロンドンに留学していた時に、自分が日本人であるという事実を背け、一生懸命に「外国人と同じ思考回路・振る舞い方を身につける」ことによって外国人を理解できているような、少なくとも私の目にはそう映ってしまった日本人留学生を何人も見かけました。明治時代にイギリスから日本にやってきたラフカディオ・ハーン(小泉八雲)のように、人生をかけて外国文化を理解しようとした人たちにとってはそれは確かに大事なことだったろうと思えますし、また我々普通の人間について考えてみたときもそのような考え方が間違っている、と言い切れるだけの経験も自信も私にはまだありませんが、やはり我々が外国人とお付き合いしていく以上は、相手を理解しようと努めるとともに、自分が持つ日本文化の型というか性質というか、そのようなものを「相手に理解してもらおう」努力をすることも、同様に非常に大切なことだと思うのです。

#### 異文化を理解することはそもそも可能なのか？

「人間は大変適応力の低い動物なのではないか」というのが私の実感です。それはよく言われるように日本人の専売特許なのでは決してなく、他の民族・文化においてもある程度は当てはまっていると思えます。ユダヤ人や中国人など歴史的に世界をまたにかけて商業活動をしてきた民族でさえ、その土地にある種の閉鎖的なコミュニティを作っていたのですから。また例えばロンドン留学中にも、スペイン語圏の留学生は彼ら同士で大変強いコミュニティを作りますし、欧米、韓国、日本など、共通の文化を背負ったグループ同士で固まって行動しがちだったように記憶しています。個人的には、それはそれで自然なことだ、とっていましたし、実際に外国人留学生とも食事やパーティーなどで一緒にすることも多かったですが、同時に日本人同士での付き合いもかなり頻繁に自然に行っていました。これは先進国のしかも大学での話なのですが、目を途上国に向けてみるとまた少し違った様子が見られます。これもあくまでも私個人の印象なのですが、途上国においては例えばアメリカ人やヨーロッパ人、日本人が、出身国や地域に関わりなく「先進国から来た人」というカテゴリーで一致団結しやすい、ということです。それは恐らく「先進国VS途上国」といった単純な精神的対立の図式なのでは決してなく、物質的に豊かな社会で育ったもの同士が、途上国生活で感ずる苦労や楽しみ・価値観、といったものを共有しやすいからなのだと思います。私の勤務する国連オフィスでも、私と私の上司二人以外のすべてのスタッフは現地の方々であり、しかもそのスタッフはいずれも非常に知的レベルが高く外国人との接し方も大変上手な人たちなのですが、やはりたまにアメリカやヨーロッパ、日本などの「先進諸国」からやってくるミッションの人たちと国連オフィスで話をする機会があったりする時には、正直ほっとするところがあります。こんな僅かな例を挙げて「だから異文化を本当に理解することはそもそも不可能だ」と結論づける気はさらさらありませんが、異文化理解ということは世間で言われているほど単純なものでもありませんし、社会的にかなり複雑な要素の絡んだ、かつ難しい営みであることだけは間違いのないと思っています。



#### 自分自身における実践



この稿の前半部分にも書きました通り、私の場合「生活防衛上」どうしても異文化を理解して自分の中で消化し、文字通り日々自分の前に現れるその土地特有の様々な問題に対処していく必要があるのですが、そのために自分が一番気を付け、かつ自分に課しているのは、「寛容でいる」ことであり「楽観的でいる」ことです。と言いつつ、今日の政府の役人とのミーティングで日本の常識では考えられないような横柄な態度を取られた、とか、昼間乗ったタクシーで交渉した値段以上の額を請求されて運転手と小競り合いになった、とか、そんなつまらないことでも数時間は腹立たしく思ってしまう自分がいるのですが、結局あとになって考えると笑い話にしてしまえるような精神的タフさを持つように心がけています。ここまで入ってこられたら自分のアイデンティティとか存在といったものが否定されてしまう、といったある一定のラインを自分で定めて、そのラインの上で「この落としどころまで持っていければ良し」とする考え方を、特に仕事においては実践していくようにもしています。しかし繰り返しますが、自分の個人としてのアイデンティティとともに日本人としてのアイデンティティをしっかりと確立していく努力は、相手の人物や文化を双方向的に理解していく上で大変大切なことだと思います。日本人は特に、相手に自分の言いたいことを伝えるのが上手ではない民族ですし、自分も海外で働き出してしばらくはあるレベルのコミュニケーション術を身に付けるのに大変苦労しましたので、しっかりとした自分を確立して、しかもそれをうまく相手に伝える努力も自分自身し続けていく必要があると思っています。過去の話になりますが、私の先輩のラテン系出身の国連職員と日本の外交官の二人のミッションにご一緒させてもらった時のことです。その日本の外交官は大変温厚な方で、私から見て人物的にも素晴らしい方だったのですが、感情を表に出すタイプではなく、どちらかというとな無口(日本人としてはとても自然な感じでしたが・・・)な方だったために、その友人が一日に何度も何度も「彼はなぜしゃべらないんだ?」「彼は怒っているのか?」「俺のことが嫌いなんだろうか?」と私から見るととても可笑しく思われる質問をしてきたことがありました。「日本人の振る舞いとしてこれはとても自然なことなのだ」と後日、その友人に対して私の方から説明はしましたが、一応納得してもらうのにかなり苦労しました。そのとき痛感したことは、日本人は損してるなぁという少し悔しい思いと、自分自身への教訓として、自分のことを言葉で説明して納得してもらうこともやはり大切なことなのだ、ということでした。

ところで最後になりますが、私の体験のなかから楽しかったことも書いておこうと思います。異文化での生活においては自分のアンテナの張り巡らし方によって、日々楽しい発見があるように思います。ブルガリアで私はおばあさん家主と一緒に住んでいたのですが、ある夜ふとんにもぐってみると冷たいピンが数本あり、ぎょっとして彼女に文句を言いに行くと、「自家製ヨーグルトを発酵させるために人肌が一番適しているから、一晩宜しく頼む」みたいなことを言われ、苦笑しつつヨーグルトと眠ったことは忘れがたく、とても楽しい思い出として残っています。(残念ながら、その"自分製"ヨーグルトの味は忘れまして・・・)。



・・・次号に続く(次号はいよいよ最終回です)

[Back to top](#)

## ■ TOEFL 受験者インタビュー



8月15日、この日は我々日本人にとってどのような日であるのか、改めて自分の胸に問うことになりました。毎年、戦後何年といわれ、心のどこかで意識しながらも、事実が史実に変わりつつある現代に生きる我々にとって、今回の受験生の言葉には『重み』があり、真実を伝えることの大事さを痛感いたしました。また『英語は、あくまで人間同士のコミュニケーションのための道具である』、この使い古された文章があまりに新鮮に感じられたインタビューとなりました。

(この記事は、2002年8月23日に配信されました。)

### ☞ 受験者データ

名前： 匿名希望  
 年齢： 66歳  
 性別： 女性  
 職業： 無職  
 CBT受験回数： 10回  
 将来の夢： 海外の大学院に入学し、将来は平和問題に取り組み、国際理解を深める活動に携わりたい。  
 インタビュー日： 2002年4月22日(月) 青山CIEEレセプションにて

#### ---TOEFLを受験される経緯に関してお聞かせ頂けますか？

仕事を退職したことで公的に、また家庭での役割も一段落着いたことで私的にも解放され、自分の時間ができました。  
 ようやく昔から想いつづけてきたことを実行できるかなと思ひまして、TOEFLを受験しています。

#### ---昔から想いつづけてきたこととは何ですか？

もともと仕事として『教育界』に長年携わってきた経緯もあり、いずれは海外の大学院で専門分野を学びたいと考えていました。多くの大学を研究する中で、ニュージーランドにあるオークランド大学で教鞭をとっていらっしゃる先生の存在を知りました。私はその先生のもとで国際政治学の研究をして将来の平和活動に活かすことが夢なのです。その夢に向かって今、第一歩を踏み出したところです。

---他の英語検定試験のご経験は？

英検は、今から30年、いや40年ぐらい前に1度受験した記憶があります。TOEICに関しては、これまでに試験に臨んだことはありません。私の夢が海外大学院留学である以上TOEFLを受けつづけることになります。本当は早く良いスコアを獲得して留学をしたいのですが、なかなか難しくて・・・。  
日本にいるためにこのインタビューに応じているわけです。(笑)

---具体的にどのような試験対策をされていますか？

TWE(Test of Written English)に毎回力を入れています。個人的に学校に通っており、専門のネイティブの先生にWritingをみてもらっています。先生が採点してくれたスコアを励みにして多くのトピックに取り組んでいます。本番では、毎回どのようなトピックが割り振られるのかが非常に楽しみでもあり、不安でもあります。  
『あ、今回は当たり』だとか『予想外だった。』とトピックが与えられた時に考えてしまいます。それにしてもTOEFLは、集中力がいらいますね。試験後はいつもくたくたになってしまいます。

---「英語」は、あなたにとってどのような役割を果たしていますか？

私は戦争を経験している世代であり、戦争という事実を伝える使命があると考えています。  
それは海外・国内を問う問題ではありません。海外に伝える、その手段として英語があるわけです。あくまで英語はコミュニケーションの手段です。日本人である私達にとって、英語を通して真実を海外に発信することは重要なことだと考えます。  
日本人はあまりにも行動をなさすぎると思うのです、つまり発信者にはなりたがらない、思っているだけで行動しなければ何も残らないと思います。  
このような背景のもとで今TOEFLを受験しているのです。

---何か印象深い出来事は？

1999年8月に私が広島・長崎の原爆について書いた文章が、英字新聞に掲載される機会がありました。それは、まさに私が事実を伝える発信者になれた時であり人生の中で最も興奮した出来事でした。  
今でもその日の感動は言い表せません。  
これからの勉強の励みになる出来事であったのは確かです。

---本日はお忙しい中、またお疲れのところありがとうございました。

(聞き手：TOEFL事業部)

[Back to top](#)



## ■ テストセンターツアー

～最終回：新横浜テストセンター～

約1年に渡って全国のCBTテストセンターを紹介してまいりましたが、今回の新横浜会場をもちまして最終回を迎えます。JR新横浜駅徒歩5分と交通の便も非常によく、落ち着いた雰囲気のあるテストセンター。またワールドカップ決勝戦が行われるなど国際都市としての躍進も著しい新横浜。世界へ羽ばたく第1歩は新横浜テストセンターから！



(この記事は、2002年8月23日に配信されました。)

### 写真で見る新横浜テストセンターとその界限



#### 横浜PTCテストセンター

関東地区の新横浜に位置するテストセンターです。受験者は都内を含め、新幹線を利用して全国各地から来場しています。

会場は本社の茅場町と同じく4センターあり、土日や月末は毎回50名以上が試験に臨んでいます。



#### 国際都市、横浜

テストセンターから、徒歩5分のところに「新横浜ラーメン博物館」があります。昭和30年代の街並みを再現した中に、全国のラーメンの名店が軒を連ねています。修学旅行生を含む、多くの観光客が訪れています。



#### MM21地区

新横浜から地下鉄に乗って15分ほどで、「みなとみらい」や「大観覧車」などで有名な桜木町に着きます。



#### 横浜赤レンガ倉庫

先日「赤レンガ倉庫」もオープンし、連日、賑わっています。



### 中華街

中華街も近くにあり、テスト終了後に気分転換するには事欠きません。



### FIFAワールドカップ会場

横浜テストセンターは、2002年FIFAワールドカップの試合会場のすぐそばです。会場となった「横浜国際競技場」へはテストセンターの前の大通り「セントラルアベニュー」を進めば行くことができます。テストを終えた後に感動の舞台を散歩してみてもいかがでしょうか？



### 受験生の皆様へ

横浜テストセンターは、JR・地下鉄の「新横浜」が最寄駅になります。会場の待合室には全員の受験者に座っていただける椅子と、静かな落ち着いた環境を試験開始1時間前にはご用意しております。当日は時間に余裕を持って来てください。

(聞き手：TOEFL事業部)

[Back to top](#)

## 地方セミナーのご報告

～ 地方開催のTOEFLセミナー～

国際教育交換協議会(CIEE) TOEFL事業部では毎月2回無料のTOEFL説明会を東京で行っておりますが、地方からの熱いご要望にお応えし、4月と6月には広島・福岡・京都でも開催いたしました。今回は各セミナーのご報告をお届けいたします。



(この記事は、2002年8月23日に配信されました。)

### 福岡での開催

日時：	2002年4月20日(土) 15:00-16:00
場所：	福岡県国際交流センターこくさいひろば
共催：	福岡県国際交流センター
参加人数：	35人

福岡でのTOEFLセミナーは福岡市天神に位置するアクロス福岡の福岡県国際交流センターこくさいひろばで開催しました。当日は、留学を目指す高校生の方々や、たまたまこくさいひろばに立ち寄られた方々が多数参加され、皆さん最後まで集中して聞いてくださいました。熱心な参加者の方から次々と質問を頂き、情報収集の場として大いに活用いただけたようです。

[Back to top](#)

### 広島での開催

日時：	2002年4月21日(日) 13:00-14:30
場所：	広島国際センター
共催：	エフエムふくやま、中国新聞社
参加人数：	30人



広島でのセミナーは、地元のラジオ局や新聞社にもご協力頂き、多くの方々にお知らせできました。セミナーでは、主にエッセイ(ライティング)の書き方を中心に、講師の椿先生から丁寧に説明がありました。参加者の方々からは、「ためになった」「TOEFLについての理解が深まった」と大変に好評をいただきました。

[Back to top](#)

### 京都での開催





日時：	2002年6月5日(水) 18:00 ~ 20:00 2002年6月6日(木) 16:45 ~ 19:00
場所：	同志社大学新町キャンパス(6/5) 同志社大学京田辺キャンパス(6/6)
参加人数：	300人(2日間合計)

京都でのTOEFLセミナーは開催場所が同志社大学ということもあり、学生の方が多く参加されました。殆どの方が熱心にメモを取りながら聴いておられ、勉強方法に関する質問などが多く寄せられました。参加者の皆様の意識の高さと熱気が伝わってきました。

[Back to top](#)

\* \* \* \* \*

国際教育交換協議会TOEFL事業部では、2002年秋に下記のスケジュールでTOEFL説明会を実施いたしました。

日程	開催場所
2002年8月21日	大阪
2002年8月24日	大阪
2002年9月27日	神戸(日米教育委員会主催「アメリカ大学留学フェア」にて)
2002年10月11日	札幌(日米教育委員会主催「アメリカ留学相談会」にて)
2002年10月20日	仙台(日米教育委員会主催「アメリカ留学相談会」にて)
2002年10月25日	福岡(日米教育委員会主催「アメリカ留学相談会」にて)
2002年11月1日	京都(日米教育委員会主催「アメリカ留学相談会」にて)
2002年11月2日	神戸(日本国際教育協会主催「海外留学フェア」にて)
2002年11月8日	名古屋(日米教育委員会主催「アメリカ留学相談会」にて)
2002年11月15日	沖縄(日米教育委員会主催「アメリカ留学相談会」にて)

[Back to top](#)